

## [回想] やまと隕石第1号の拾得

成瀬 廉二

本稿は、北大低温科学研究所の広報冊子「低温研ニュース」No. 21 (2006年6月)に寄稿した「氷河と私：三話」のうちの一話『南極やまと隕石1号発見の顛末』を若干加筆、改稿したものである。本文で述べるように、当時は隕石を探そうとか、あるかもしれないと思っていたわけではなく、単に“何気なく拾った石”が、帰国後、隕石であったことを知らされたのである。したがって、現場の私としては「隕石を発見」したつもりはないので、本[回想]のタイトルは「南極やまと山脈近辺の裸氷域における石ころの採取」が最も妥当と考える。しかしこれでは、普通の人には読んでみようとは思わないし、仮に読んだとしても本文の最後になるまで意義が不明であるので、後日名づけられた「やまと隕石第1号」のキーワードは含めることにした。

なお、本稿執筆時は、第10次隊が採集した隕石の個数は11個とされることが多かったのでそれに従ったが、現在は9個ということに全関係者が認識している。 (2011. 4. 12)

1969年12月下旬、私たち第10次南極観測隊の内陸旅行班10名は4台の雪上車に分乗し、氷床の流動速度を測定するため三角測量をしながらやまと山脈へ向けてゆっくり走っていた。数日前から、前方の地平線にやまと山脈の露岩が見え始め、それが日に日に少しずつ近づきつつあった。雪面は、雪から徐々に氷に変わり、それにともないクレバスも現れるようになってきた。4台の雪上車がお互いに見通せる位置を保ちつつ、菱形のような陣形で移動していた。

その時私は、吉川暢一ドクター運転の小型雪上車の助手席の椅子の上に立ち、天蓋から顔を出し、クレバスの方向と大きさに注意しつつ、次の最適な測量点を探していた。ふと雪面に黒いものを見た。牛の糞が凍って丸く固まったような感じがした。近づいてよくみると、小児のこぶし大の“石”だった。ただの石ころだと思ったけど、車から降りて珍しそうにじっくり観察した。砕けた岩屑のように鋭い角がなく、溶岩のように表面が少し溶けたようにも見えた。

11月初めに昭和基地を出発し、12月に入ってから新しい未知のルートを進んできた。何回も通る“街道”を走っているときは、ところどころに空ドラム缶が

置かれていたり、雪尺や測器が設置されていたり、車の汚れたオイルやゴミ、廃棄物が捨てられていたり、何らかの人為的な物体が目につく。しかし新ルートでは、視界の中に入る物は雪か氷しかない。空には雲も見えるが、これも氷の粒だ。鳥も内陸のここまでは飛んでこないで、糞も落ちていない。山脈の下流側なら、露岩から削られた数多くの岩屑（モレーン）が氷のベルトコンベアーに乗って帯状に氷を被うことがある。しかし、この"石"を見たところはやまと山脈の上流側であった。

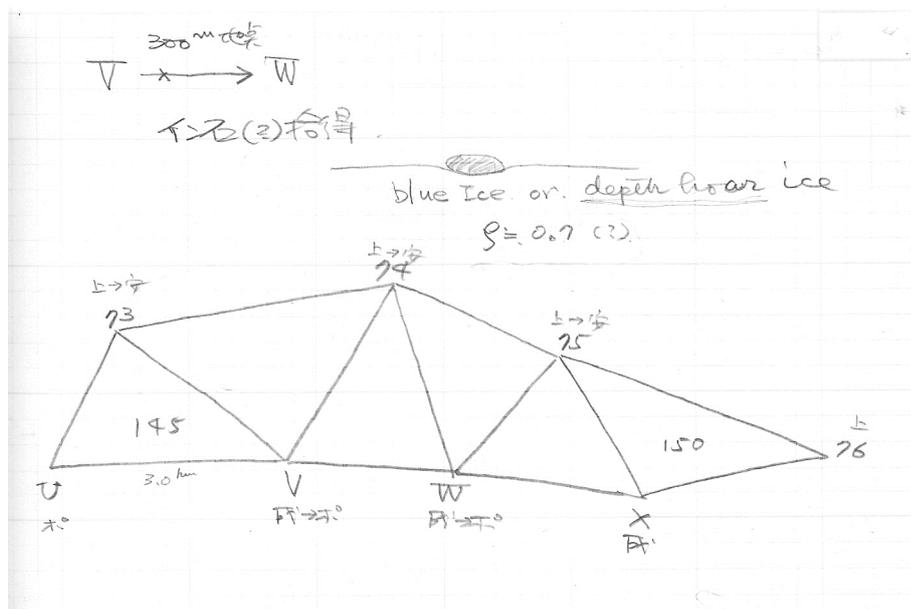


図. やまと山脈旅行ログノートの1969年12月21日のページの一部。  
13:00GMT頃、測点 C-V から 300 m 地点にて石ころ拾得.

「何でこんなところに石があるのだろうか?」と思い、フィールド手帳に簡単なスケッチとメモを書いた。石ころは下半分は氷に埋まり、上半分が露出していた。氷は気泡が非常に多く、メモには「blue ice or depth hoar ice」と書いてある。つまり、「青氷、または霜ざらめ雪が氷化したもの」と思ったようだ。また、「 $\rho \doteq 0.7 (?)$ 」とあった。これは、氷の密度が約  $0.7 \text{ g/cm}^3$  ということを示す。すなわち、完全には氷化していない固い雪ということになるが、本当のところは分からない。

石ころを見つけた時、私は現場の状況写真を撮っていない。ただの石をわざわざ写真に撮ろうなんて思うはずはなかったのだ。すぐにその"石"を拾い、ポケットに入れ、念のためにピッケルで 30 cm ほど氷を掘り、ほかには石がないことを確認してその場所を離れた。

毎日、朝と夕の食事時には、カブースという橇の上の木製の小屋（ダイニングキッチン）に全メンバーが集まる。"石"を拾った日の夜、カブースに入るとす

ぐ地質担当の吉田勝氏に「これ隕石じゃない?」と言いつつ無造作にポケットから取り出した石を渡した。もちろんその時私は隕石についての知識はほとんど持っていなかった。ましてや、南極の氷の上に隕石が落ちているなんて思っても見なかったことである。とっさにこういうことを言ったのは、先輩の吉田氏をからかってやろう、ということであった。彼はその時、「うーん」と言ったまま、多くを語らなかった。そして翌日の朝食時に、「隕石の可能性があるので、それらしい石を見かけたら拾って下さい」と、吉田氏は全員に告げた。その結果、私たちのパーティーで合計"11個の石"を収集した。

帰国後、それらのサンプルは専門家の下へ届けられ、分析の結果、すべてが隕石であることが判明した（ただし、極地研の公式記録では9個となっている。その差2個は、紛失、または記録漏れ等、ミステリーだと吉田氏は述懐している）。その後、日本南極観測隊では数回（年）にわたり隕石の集中探査を行い、2000年の第41次隊までに総計16,728個の隕石を南極で発見、採集されている（南極・北極の百科事典、2004）。

その隕石第1号を私たち、中でも私が拾ったという"荣誉"は、今まで（北大退職時の最終講演まで）公の場では一度も口にしたことはなかったし、印刷物に書いたこともなかった。それは、そういう機会がなかったこともあるが、自分は別の専門に没頭していたこと、仮に私が拾って届けなかったとしても後日別の人が別の"石"を拾ったに違いなく、第1号の"拾得者"として記録されるべきものでもない、と思ったからである。

(2006年5月30日、記)